第16号
発行日　平成6年6月10日
発行所
東京青山同窓会事務局
〒153
目黒区東山1-3-1-401
TEL　03-3716-3667
発行者　豊岡　富栄

東京会報

東京青山同窓会
東京青山同窓会年間維持費
1口1.000円2口以上（年間）
会計幹事　小林元雄（61回）
振込先
安田信託銀行　虎ノ門支店
普4046552　東京青山同窓会
郵便振込口座　東京9-710451

斉藤英四郎名誉会長（36回）

斉藤伸雄会長（44回）

平成6年度
時局講演会開催される。

平成6年4月27日(水)18時より東洋経済9階ホールで講師2名を招いて「時局講演会」を開催した。

豊岡幹事長の司会で在来の同窓会員80名が参加し、約90分の講演に耳を傾けた。

「激変する国際情勢と日本の課題」
東京大学教授　猪口　孝
「マスコミ報道五つの落し穴」
日本放送協会理事　曽我　健

生々しい最も新しい話題を提供し、問題点を解説した。

講演会修了後は講師を囲んで同期、先輩、後輩の同窓生が新潟弁を交えて歓談し、相互に健康を祝し合った。

斎藤伸雄会長　挨拶

本日は、わが国の第一線で活躍しておられる代表的な論客にご登壇をお願い致しました。

最初に70回生で現在東京大学教授(東洋文化研究所)をしておられる猪口孝先生と、62回生のＮＨＫの理事をしておられる曽我健氏です。皆さんは既にテレビ等で活躍されておるので御存知かと思いますが生の声をお聞きして啓蒙されるところ大であると期待する次第です。

出席者

32回　曾我英彦
36回　斉藤英四郎
39回　中村　健
44回　今井養乃介
　　斉藤伸雄
46回　佐野英一
　　富所強哉
48回　石本文二
50回　瀬谷　誠
52回　浅田　稔
　　栗原一也
　　見島泰一
　　斉藤泰五郎
　　豊岡富栄
　　広川昭二
53回　岩原　昭
　　佐藤修二
　　佐藤良策
　　林　博
54回　安達信吾
56回　井上菊雄
　　三崎正一
　　宗村禎三
58回　露谷秀雄
　　村山　保
59回　山崎　徳左ェ門
60回　池浦厚司
　　河田鉄雄
　　富山和夫
　　長谷川信夫
61回　安宅久憲
　　大橋恒夫
　　熊谷隆幸
　　小林元雄
　　田中忠夫
　　谷田部　信
62回　石田　寛
　　内山隆之
　　田中良三
63回　林　嵩
64回　川崎　明
　　土屋利之
65回　水野左敏
　　吉田治彦
66回　石山芳春
67回　斉藤久美子
　　佐々木邦夫
　　桧川哲之助
68回　鈴木裕徳
　　竹石　爾
　　田中宣男
　　村山隆男
70回　和泉　啓
　　桂　さわ
　　関口明子
　　高野義樹
　　山本憲久
71回　斉藤　誠
73回　小川幹夫
73回　山田時也
74回　石井拓男
75回　有薗順子
　　川上　滋
　　後藤輝雄
　　高橋　正
　　藤井　建
78回　川崎雅樹
79回　渋谷　徹
82回　遠藤克栄
　　日下部朋子
83回　佐藤　扶
　　佐野栄二
84回　太田淑子
　　島津　孝
85回　関　文枝
86回　角田智子
90回　木村和人
101回　佐藤朋範

激変する国際情勢と日本の課題

東京大学教授
政治学博士
猪口　孝（70回）

「三つの終焉」

今、日本の政治情勢は激動しておりますが、世界の動きといわば軌を一にしているといえる。三つの大きな視点に要約するなら冷戦の終り、地理の終り、歴史の終りとしぼることが出来るのではないか。

アメリカはソ連に勝って絶対的優位に立つようになった。ただし中長期的にみるとアメリカ自身、経済的に技術的に足腰が弱まってくるのではないかと心配になる点がある。

第二に地理の終焉。世界のどこで経済活動が行なわれても、瞬時にして地球上のあらゆる地点に伝わる。電話、ファックス、テレビ、衛生放送等の通信網の発達が地球を一体化するようになった。

また自由化の波がすべての国に押し寄せ、国境という垣根がなくなった。

中国、ロシアに限らず、アルジェリアでもアルゼンチンでもどこでも同じです。自由化するとそれまでは、国内で一番

であればよかったものが、世界のどこから競争者が現れるか分らなくなった。何百億、何千億、何兆円か使って優位を誇示していたものが、一夜明けてみれば無駄になってしまうようなことが、次々と起こってくる。どこの国でもウカウカしていられなくなった。これが地理の終焉のむずかしいところです。三番目の歴史の終焉というのは、共産主義が魅力を失ったことと係ってくる。これまでは人間幸せに生きる上で、資本主義と共産主義との間のどこを調整するかというやり方で良かったものが、今や自由化の旗のもとで、好き放題、勝手に行動するようになった。自民党などでも、38年間、政府のやることに歩調を合わせておればよかったものがそうはいかなくなった。

日本の資本主義はどこを見ても、それぞれ自粛とか自主規制とかでやってきたものが、みんな勝手にモノを言い出しはじめ、バラバラ、ゆるゆるになってしまりがなくなりつつある。ここが歴史の終焉のむずかしいところと思う。

海外での動揺など大変なもので、3月にベトナムに行ったとき、これは大変だと思った。日本の陸軍が1941年、それ以前でもフランスが支配していた。第二次大戦後、独立したかと思うとフランスが帰ってくる。フランスを追い払えばアメリカがやってくる。アメリカがいなくなったあとは自分が今度はカンボジアに入り込む。ところがそこへ中国が攻めてくる。中国を追い払ったと思ったらカンボジアがうるさい、カンボジアと争っていると国連がやってくる。こんな調子が半世紀紛争続きだった。その間500万人くらい死んでいるわけです。

ベトナムで今最も重要な課題はアメリカとの国交回復です。それがないと何も始まらない。外貨が何もないから、どうしようもない。

昔ホーチミンが自由と独立ほど尊いものはないと言ったそうですが、自由と独立はあっても、国の実体としては何もない国民は諦めつつも必死になって立ち上がろうとしている。それが激しい国際競争心になって現れているんですね。先のベトナム訪問のときあちらの中古バスに乗ったんですね。危なくないのかヒヤヒヤものだったけれども、女性の服装が極端に変っている。元来ベトナム航空は伝統的にアオザイだったわけですが、昨今ベトナムのスチュワーデスは白と青をあしらい、体形もあらわな姿に変っている。透明度も露骨なんですが、国際意識をむき出しにして、それほど外貨獲得に懸命になっている。何もないから、市場を開放すると周辺からどっと入ってくる。貿易はシンガポールが1位、直接投資は韓国、台湾が上位にあるんです。何もないから海外に頼らざるを得ない。ベトナムの現状はわれわれが子供の頃、新潟の郊外でみられた田園風景と同じなんですね。きわめて前近代的だ。そこで問題が出てくるのは、いざ市場を開放すると数％の中国系がやり手で力を発揮し、他とのギャップが拡がる。インドネシアやスマラのように暴動が起こる。

何しろ国全体では年10％くらい所得が伸びるといっても、中国系の方は20％とかそれ以上になるので、他の国民は不愉快になるから、暴動は起こるべくしておこる。

「ルーツは同じ流れ」

共産主義が魅力を失って、無秩序の中で、動揺、不安が高まると、結局公安警察の力がはびこるようになる。

飛行機の搭乗者の会話の中でも、何か雰囲気がおかしい。降りてからでも、女性とその部下らしいものが私の後からついてくる。様子がおかしい。保険省の家族計画会議で台湾からの帰りだというのでもしかしたら公安なのではないか。私はなまじベトナム語を少しやったお陰で言葉をかわし、妙な、眼つきで探りを入れられたような気がした。

ベトナムでは極端に現われているけれども、これはソ連の混乱でも、或いは日本の政治情勢の激動でも流れは一緒かと思う。現在我が国の連立政権の中で争われている問題の一つは北朝鮮の核開発です。これは冷戦の終結と関係がある。軍事的には圧倒的にアメリカの力が強く、去年から北朝鮮を囲んで、ミサイル、爆撃機がいつでも一斉攻撃出来る態勢になってる。北朝鮮は完全に破壊されているわけですが、北朝鮮の軍隊はこれに対応して地下にもぐっている。ひょっとしたら地下壕は韓国の内部に入っているかもしれない。韓国も極端なソウルへの一極集中型になっているので、万一の場合、何が起こるかわからない。こういう北朝鮮包囲態勢をとるのはアメリカが足腰のしっかりしている中に、封じ込めておこうと思うからです。

連立政権内部でもう一つの問題になっているのは税金の問題ですが、国際情勢と無縁ではない。アメリカからすれば地球上の現象は自由化の大勢に沿って、日本も金融、保険、証券をはじめ自由化に踏み切って貰いたい。しかし官僚はそう一挙にやられてはたまらない。まして不景気なんだから、徐々に調整していくほかない。そこで景気回復の一つの方策として減税案が出てくる。新生党などは減税をやるなら一方で増税をやらないとツジツマが合わない。社会党はこれに同調できないでもめにもめ、政治再編に大きな波紋を描いたわけです。世界的激動の中にあっても日本は、無秩序に動かず、為替も安定しているが大きな流れと無縁であるというわけにはいかない。もう一度要約すると、冷戦はアメリカの勝利に終ったが、当のアメリカも先行き問題なしとしない。通信網の革命的進歩の中で自由化の波があらゆる国に押し寄せている。共産主義の脅威はなくなったが、全ての国で個別的に勝手な行動が見られる。この歴史的大きな変革を見据えてその文明の中でどうすべきかを判断しなければならないということなのであります。

マスコミ報道五つの落し穴

日本放送協会
理事
曽我　健
(62回)

私は昭和11年生れでありまして亀田町から新潟高校に通っていました。

ＮＨＫでは、3年ほど前までニュースの現場におりました。世の中はいつでも激動が絶えないのでありまして、当時はちょうど湾岸戦争の最中で、嫌になるほど事件が相次いでいました。時差がありますので、夜、昼なく多忙な毎日が続きました。

「ニュース速報競争」

昨年から細川不眠症なるものに取りつかれておりましたが、今日は小沢不眠症

が悩みのタネであります。と思うと名古屋空港におけるエアバスの大事故発生という具合で心の休まる暇がない。十年一昔とは以前のこと、今は一年一昔です。丁度一年前に何があったか、初の宮沢・クリントン会談です。誰も細川さんが総理大臣になるなど思ってもみなかった。何しろこの5年間でわが国の総理大臣は5人も代っている。3年前を考えてもブッシュ元大統領が圧倒的支持率を誇っていたし、ゴルバチョフ氏も健在だったが、今や影も形もない。原因は何かといえば、猪口教授の話しにもあったとおり、三つの終焉が指摘される。これにもう一つニュース屋から加えさせて頂けば、情報化の進展ということがあったのではないか。私たちが新潟で育っていた頃はまだテレビというものがなかったけれども、今はどこの家でも、2台、3台はあたりまえのようだ。テレビ開局40周年などといっているけれども、実際にテレビを通じて情報が噴水のように流れはじめたのは、この14～15年のことなんですね。エレクトロニクス革命で世界が縮まった。

これが国際情勢に拍車をかけているように思う。一つの情報があっという間に世界をかけ巡るとその情報がリアクションを呼び、絡み合っていろんな形で世界に波紋を描く。忙しくなるわけであります。数年前から私たちの合言葉にＴＮＴというのがある。今日のニュースは今日のうちに放送してしまうという意味ですがそれが2～3年もたないうちに、ニュースはその場で放送してしまえということになった。

やがてマルチメディアの時代がやってくると、いつでもスイッチを入れれば欲しいニュースを見ることが出来るようになる。

平成5年の通信白書を見ると、1981年と1991年とでは、電気通信業の情報発進量は、何と31倍という大きな増え方をしている。今回のエアバスの墜落事故でも、残念なことに8時16分に事故が発した10分後に、NHKではなく、日本テレビが、ニュース速報をして電波に乗っている。しかし、その一方で、情報氾濫の時代に入ったともいえるわけで、よほどしっかり、情報を見抜く力をもっていなければならなくなった。うっかりすると、情報に巻き込まれて溺れてしまう。そこで、私なりに5つの落し穴を、考えたわけです。

「湾岸戦争報道の虚実」

湾岸戦争を例にとりますと、あれは別名情報戦争等ともいわれた。開戦の火ブタを切って落とされたのをいち早く伝えたのはテレビです。戦争が始まればいつかはニュースになると思っていても、こんなに早くテレビに映し出されるとは思っていない。ブッシュ大統領もフセイン大統領もテレビを見ながら戦争ゲームをやっているようなものでした。ベトナム戦争のときは、戦場からフィルムをサイゴンに送り、現像してアメリカ本国へ送っていたので丸1日時差があった。それにひきかえ、湾岸戦争は時差ゼロです。3年前の4月17日の朝、C.I.Aのテレビをみていたら、西方に閃光が映っている。何か起ったようだけれども何だか分らない。それからご記憶かと思いますが、フセインが原油タンクの爆破を命令したと伝えられた。真っ黒に汚れた海鳥が無惨な油まみれのまま、視聴者の眼に映った。人々はイラクの環境破壊を許せないといって怒った。ここで考えなければならないのは、第一報というのは限られたニュースが断片的に伝わってくるために、実相がなかなかよく掴めない。閃光が画面に走ってもそれが戦争だとはその瞬間には分らない。海鳥にしても原油タンクの爆破などではなく、いつも流れている石油によるものだとあとで判明した。一報、速報で安易な判断を下すと、つい落し穴にはまる一つの例です。

そして例えば地震、事故などのニュースでも最初は小さく伝わりがちである。名古屋空港の中華航空エアバス事故でも、第1報では生存者は多いように伝わったが1時間後には死者63名、2時間経つと160名、翌朝の新聞では240名、午后になると262名という風に刻々変る。自分にとって重要な事件であればある程、時をじっと追う必要がある。

「予想(よそう)はうそよ」

二つ目、情報化時代を迎えて予測報道が多くなってきたことがあります。

三つの終焉があって世の中分りにくくなった。予想もなかなか当らない。

湾岸戦争を思い起こしてみると、イラク軍の撤退報道をめぐって、フセインは撤退するだろうというのがおおかたの見方であった。まだ撤退期限を過ぎても多国籍軍はすぐには攻撃しないだろう、また仮に戦争が始ってもイラクの地上軍は力があるので戦争は長びくだろう、というのが有力な見方であった。

ところが第一の予想と違ってフセインは撤退しなかった。第二、多国籍軍は直ちに攻撃を開始、これもまだ予想を裏切った。第三、イラクの抵抗は長びくだろうとの予測も外れ、圧倒的な多国籍軍の攻撃にイラクはあっけなく白旗を掲げた。

いろいろな予想ニュースを見ていてもなかなか当らない。昨年8月6日の政変でも細川さんが首相になるとは誰一人予想しなかった。当時の新聞、テレビでは混乱の中で首相は決まらないだろうとみていたが夕方になると情況が一変して一気に話が進んだ。外務大臣も松永(元駐米大使)、盛田(ソニー会長)説が乱れ飛んだが、羽田外相に落ちついた。今度の羽田内閣でも羽田総理は決まってたものの例の「改新」問題で組閣は手間どった。最近天気予報は当るようになったが、政治、経済、社会問題に関しては、事実と予想はきっちりと分けて把握しなければならない。「予想」は反対から読むと「うそよ」になるのであってその位の気持ちで読み分ける必要がある。どの時点で何をどう予測するかを予め読み込んでおかなければならない。

「一極集中の嫌い」

第3、日本のマスコミには何か大事件が起こると、あらゆメディアが集中してしまう傾向がある。湾岸戦争が始まると事件はそれしかないような報道姿勢になり、政局が急変すると一極集中的にそれだけを伝える。今回の航空事故に際しては、政局を知りたいと思ってもすべてのチャンネルを回すのですが政治向きの映像は一切出てこない。航空事故一本槍になってしまう。それにワイド、ショーや週刊誌までが一極集中に輪をかける。さらに情報の魔術がある。テレビの映像は事実を語っていると思われがちであるが、実はあくまでも事実の一部だということです。多くの事実の中からカメラマンが切り取った情報をお茶の間に届けているという認識を持たなければならない。湾岸戦争のときを例にとると米軍のピンポイント爆撃が好例といえる。すさまじい命中の米軍の状況が記者団に示されると集中攻撃のすさまじさを感じないわけにはいかない。しかし命中したところだけをうまく編集したことはあとになって

わかったことです。

爆撃の先にあるものをよく見抜かなければならない。爆撃すれば、されるイラクの人達がいるのだけれどもテレビの上ではそれが分らない。客観的事実の半分以上は映しだされていないことを考えなければならない。

デモ行進なども参加する方と取り締まる側とではまるで印象が違っている。それを見抜く力を養っておく必要がある。これを第4の落し穴としておきましょう。

「演出される情勢」

第5は演出される情報で、これに一番気をつけなければならない。

情報操作は、ヒトラー、スターリンの時代から巧妙に行なわれ、人々は踊らされた。わが国でも問題の大本営発表というのがあった。湾岸戦争のときでも、イラク政府と多国籍軍はともにテレビを最大限に活用した。取材を制限し、検閲して情報操作を演出した。

例えばイラク軍を取材する場合、イラク側が案内する以外は撮影を認められない。許可される所へ行くと、多国籍軍に功撃されて泣き叫んでいる女性達がいる、外務省の女性秘書だとか、日本人学校の職員とか、英語の話せる女性を集めてワァワァ泣かせていた事実があった。

一方アメリカ軍の方も、戦死した兵士たちの遺体は一切撮影させなかった。ベトナム戦争のときに撮影させてこれが反戦気運を刺激した苦い経験があったわけです。それを踏まえてピンポイント爆撃のようにものだけに限定した。

当時ホワイトハウスやペンタゴンでは毎朝ミーテイングがあって、今日の記者会見ではどんな情報を誰が流すか、どんな反応があるかを細かく打合わせていたことも後日判明した。

むろんこうした情報操作は今日でもある。細川首相などもなかなか上手で、最初の記者会見のころなど議員バッジを外してイメージアップを図っていた。記者会見での説明などでもテレビでは分らないのですが、実際はカメラの埒外にある文章を読むという具合です。細川流の演出ですが、情報化時代の今日ではつきものといってよい。

「日米間の情報量の格差」

その他様々な情報の落し穴がある。

日米両国で調査したところ、日本での情報がアメリカへ伝わる量に対しアメリカからの情報は12倍という結果が出た。東と西との間の伝わり方にも格差があったりするわけで十分心してかからなければならないと思う。

この落し穴にどう対処するか。これはやはり自分でしっかりした大局観、モノサシをもっていないと落し穴にひっかかり、押し流されかねない。

小沢一郎という政治家の言動をみる場合、彼の日本改造計画という著書を読むと彼の考え方が理解出来る。その枠の中で動いていることを念頭におけば大変分り易い。テレビの場面を離れて美術館で本物をみるのもよいし、自分で積極的に情報を見る眼を養っておく必要がある。自分を取り巻く情報の中で本当に自分の役に立つのは、100に1つという話しもある。　私の話しも100の中の1つとして聞いて頂ければ幸です。

第2回斎藤英四郎名誉会長を囲む会

前号15号でも豊岡幹事長の報告文の中で書きましたが、第2回目の会を開催したのでお知らせ致します。

日時　平成5年11月30日午後6時より
場所　東京築地たむら
出席者
斎藤 英四郎(36回)前経団連会長
斎藤　伸雄(44回)和光証券相談役
山城　彬成(48回)NKK会長
田中　敏夫(49回)北越製紙社長
坂野上　啓(51回)中央信託会長
倉茂　周明(55回)大成建設副社長
栗林　貞一(59回)日本航空副社長
高橋　進(61回)住宅金融公庫総裁
長谷川義明(62回)新潟市長

斎藤名誉会長を囲んでの話題は、環日本海の中枢拠点都市を目指す長谷川市長より「新潟市の現状と展望について」説明を受け新潟市の発展を願いつつ歓談した。

事務局　豊岡　富栄（52回）
佐藤　良策（53回）
阿尻　威吾（55回）

平成6年度　東京青山同窓会 新人歓迎会　開催案内

日時　6月17日(金)18：00～20：30
場所　東洋経済9階ホール

本年も4月に希望に燃えて上京し大学生活に入った第102回卒業生を迎えて新人歓迎会を開催致します。新潟高校より担当された諸先生も上京して参加します。　多数参加して後輩を激励されることを期待しております。

詳細は事務局までおたずね下さい。
Tel.03-3716-3667

平成6年度　青山同窓会総会（新潟）

日時　平成6年7月15日（金）18：00～
会場　ホテル新潟

東京から参加される同窓会員で、新潟に宿泊される方は、ホテル新潟をご利用下さるようご案内致します。

ホテル新潟代表取締役 小松原 金二（59回）
●東京連絡所　Tel.03-3502-1004 大宮 健介

訃報　石崎　重郎（29回）H6年4月29日没
石塚　英男（75回）H6年4月23日没
（当同窓会　事務局長現職）
以上、　ご冥福をお祈り申し上げます。

*尚、当事務局は当分の間現行のままとします。
事務局長は、佐藤良策（53回）氏が代行する予定。